

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34416
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22300297
 研究課題名（和文）
 WEB 2. 0 による海外と連携した実践共同体を支援する教育システムに関する研究
 研究課題名（英文）
 Research on the educational system which can support communities of practice for collaborating overseas by WEB2.0 technology.
 研究代表者
 久保田 賢一（ KUBOTA KENICHI ）
 関西大学・総合情報学部・教授
 研究者番号：80268325

研究成果の概要（和文）：

本研究は、WEB2.0 を活用した高等教育における海外と連携した実践共同体への参加を通じた学習を支援する教育システムの開発を目的とした。3 年間の研究を通して、(1) 海外連携実践における教育システムのモデル開発、(2) 開発した教育システムの適応可能性の確認、が達成された。また、本研究の付随的な成果として、海外連携による実践の認知という (3) 各大学への波及効果があった。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to design the educational system which can support communities of practice for collaborating overseas with WEB2.0 technology. As a result, following outcomes were acquired; 1) developing the model of educational system for collaborating overseas, 2) examining feasibility of the model, 3) disseminating the practice of designing the new educational model to other universities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2012 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育、教育工学・教育工学

キーワード：教授学習支援システム、海外連携、実践共同体、WEB2.0

1. 研究開始当初の背景

従来型の教育では知識を蓄積することが重視されてきたが、近年では、現実社会において活用できる力の育成を目的としたコンピテンシーという概念が注目されるようになった。コンピテンシーを高等教育において組織的に体系化しようとする動きは文部科学省を始めさまざまある。それらに共通する

ことは、「相互作用的に道具を用いる力」「自律的に活動する力」「異質な集団で交流する力」など、社会との関係性を持ちつつ問題を解決していく力の育成である。換言すれば、専門知識の習得だけではなく、実際にこれらの専門知識を実社会でどう活用していくかを、さまざま人と協働して提案していくことが求められる。

グローバル化した社会に適応する力を育成するには、異質な人々が目的を共有し、協働して問題解決を図る機会、すなわち「実践共同体」への参加が求められる。近年では、教育分野において教員や大学院生のプロフェッショナルデベロップメントの方法として研究が進められている。たとえば、インターンシップや高大連携プロジェクト、産学連携プロジェクトは、学生がそれぞれのフィールドにおいて現実に取り組むべき課題にチャレンジする事例としてあげられる。

しかし、このような取り組みは体験をしただけで終了してしまうという問題点があった。そのため、海外と協働した活動の中に、どのように体験をふり返り、専門的な知識や技術の習得を促す機会を埋め込むことができるか、ということに関する知見が求められている。

2. 研究の目的

本研究では、以下の3点を目的とした。

(1) 国内外の高等教育機関における海外連携の実践に関する先行研究を分析し、教育システム開発に必要な要件を明らかにする。

(2) 先行実践・先行研究の分析から得られた知見をもとに、教育システムのモデルを構築し、関西大学および日本福祉大学の国際連携のプロジェクトにあてはめ、問題点を明らかにする。

(3) 構築したモデルを評価し、修正を加える。それぞれの事例から得られた知見を比較検討し、高等教育における新しい教育システムとして提案する。

3. 研究の方法

研究の目的としてあげた、3点を以下の方法より明らかにする。

(1) 先行研究・事例の調査

先行研究・事例の成果と課題を整理する。特にアメリカやヨーロッパ諸国の高等教育においては、大学外での社会奉仕活動に学習を組み込んだ「サービスマーケティング」が積極的に行われており、国内の文献に限らず海外の文献も合わせて収集、分析の対象とする。先行研究・事例の分析は、以下の観点から行った。

①海外連携実践の学習効果

国内外の大学が行う海外連携実践において育成されるべき能力、技術を整理する。

②実践共同体の育成プロセス

海外連携実践を実践共同体の観点から捉え、その育成プロセスにおける重要事項を抽出、整理する。

③WEB2.0の役割

海外連携実践において活用されるさまざまなICTツールを抽出し、その使用目的と効果を分類する。

④評価方法

活動が中心となる海外連携実践における学生の評価方法を抽出し、それぞれの評価方法の長所と短所を整理する。

(2) 得られた知見をもとにした実践の構築
構築したモデルを、海外連携実践にあてはめる。eポートフォリオシステムを導入し、学生の学習プロセスを分析し、成果と課題を抽出するとともに、モデルの修正案を提示する。

(3) 実践事例の評価・改善と適応可能性の検討

修正したモデルを再度実践に当てはめ、効果を検証するとともに、他の連携実践への適応可能性を探る。モデル修正は、連携先の文化的背景なども考慮するため、連携先への聞き取りなども行い、分析の対象とする。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の3点である。

(1) 海外連携実践における教育システムのモデル開発

関西大学と日本福祉大学のプロジェクトにおいて実践と修正を繰り返しながら海外連携実践における教育システムのモデルを開発した。海外との実践共同体の形成には、以下の4点が重要であった。

①協働的な活動に適したWEB2.0の選択

プロジェクトや実践共同体の成員、具体的な活動の性質に合わせて、多様なWEB2.0の中から適切なものを選択することが重要である。

②対面と遠隔のハイブリッドなコミュニケーション機会

海外との連携ではWEB2.0を活用した遠隔のコミュニケーションが中心になる。しかしながら、遠隔のコミュニケーションだけでは成員性を構築しにくいいため、必要に応じて対面でのコミュニケーションの機会を保障することが、海外連携実践において重要である。

③双方の文化差を理解する機会

海外との実践共同体の構築のためには、双方の文化差を考慮した活動を行わなければならない。双方の文化差の理解につながる仕掛けを実践の中に埋め込むことが重要である。

④専門性を持った教員による適切な介入

実践共同体における活動を学習として方向付け内省を促すためには、専門性を持った教員による指導が重要である。学生は教員の指導によって実践共同体の活動の中から重要なことを見つけ出し、内省をすることによって知識や技術の習得が促される。また、教員は、成員間の文化差による衝突などを回避・解消する役割も担っており、専門性を有した教員による適切な介入が重要となる。

(2) 開発した教育システムの適応可能性の確認

関西大学および日本福祉大学が行うプロジェクトより構築した教育システムのモデルは、京都外国語大学の実践においても適応可能性を検証し、実践共同体の構築に有効であることが明らかにされた。また、構築したモデルは、国内の連携実践にも適応可能であることが、関西大学が行う国内の連携実践への適応によって示された。

(3) 本研究が持つ波及効果

本研究では、海外連携実践のモデルを開発することが目的であったが、付随的な効果として、各研究分担者が所属する大学での波及効果が見られた。本研究の取り組みによって、海外連携実践が各大学において認知され、大学や学部教育の一部として取り入れようとする動きも見られる。このような取り組みが持つ意味も、本研究の成果として認められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 25 件)

- ①時任隼平、久保田賢一、卒業生を対象とした正課外活動の成果とその要因に関する研究、日本教育工学会論文集、査読有、36巻、2012、393-406
- ②山本良太、今野貴之、岸磨貴子、久保田賢二、海外フィールドワークにおける学習を促す要件の検討：協働する他者との関わりに注目して、日本教育工学会論文集、査読有、36巻 (Suppl.)、2012、213-216
- ③Takayuki KONNO、Makiko KISHI、Yasuko MINOURA、Kenichi KUBOTA、The Conflict and Intervention in an Educational Development Project : Lesson Study Analysis Using Activity System in Palestinian Refugee Schools、Journal of Educational Technology and Research、査読有、35巻、2012、43-52
- ④Makoto KAGETO、Shinichi SATO、Gary KIRKPATRICK、How to Enhance

Self-Directed EFL Learning in an Authentic International Collaborative Learning、International Journal for Educational Media and Technology、査読有、6巻、2012、76-84

- ⑤岸磨貴子・今野貴之・久保田賢一、インターネットを活用した異文化間の協働を促す学習環境デザイン-実践共同体の組織化の視座から-、多文化関係学、査読有、第7巻、105-121、2010

[学会発表] (計 23 件)

- ①時任隼平、久保田賢一、高等教育における地域社会と連携した正課外活動の研究、第28回日本教育工学会全国大会、2012年9月15日～17日、長崎
- ②岸磨貴子、久保田賢一、構成主義に基づいた高等教育の学習環境デザイン、第19回日本教育メディア学会年次大会、2012年8月31日～9月1日、仙台
- ③Kenichi KUBOTA、Social Construction of Learning: How Can We Design Constructivist Learning Environment?、ICoME2012: 10th International Conference for Media in Education 2012、2012年8月20日～8月21日、中国・北京
- ④藪内貴聖、吉田千穂、勝田浩次、岸磨貴子、久保田賢一、対面の学習コミュニティを支援する Web2.0 の活用と効果：大学院における研究プロジェクトを事例として、第17回日本教育メディア学会年次大会、2010年7月17日～7月18日、熊本
- ⑤SATO Shinichi・KAGETO Makoto、PISION: A System to Visualize Blogs and Forums、Educational Multimedia、Hypermedia and Telecommunications、2010年6月29日～7月1日、カナダ・トロント

[図書] (計 2 件)

- ①久保田賢一、晃洋書房、高等教育におけるつながり・協働する学習環境デザイン：大学生の能動的な学びを支援するソーシャルメディアの活用、2013、241
- ②久保田賢一、岸磨貴子、晃洋書房、高等教育をデザインする：構成主義にもとづいた教育実践、2012、221

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 賢一 (KUBOTA KENICHI)
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：80268325

(2) 研究分担者

久保田 真弓 (KUBOTA MAYUMI)
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：20268329

黒上 晴夫 (KUROKAMI HARUO)
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：20215081

影戸 誠 (KAGETO MAKOTO)
日本福祉大学・国際福祉開発学部・教授
研究者番号：50351086

稲垣 忠 (INAGAKI TADASHI)
東北学院大学・教養学部・准教授
研究者番号：70364396

寺嶋 浩介 (TERASHIMA KOSUKE)
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号：30367932

中橋 雄 (NAKHASHI YU)
武蔵大学・社会学部・教授
研究者番号：80389064

佐藤 慎一 (SATO SHINICHI)
日本福祉大学・国際福祉開発学部・准教授
研究者番号：10410763

岸 磨貴子 (KISHI MAKIKO)
京都外国語大学・国際言語平和研究所・研究員
研究者番号：80581686

今野 貴之 (KONNO TAKAYUKI)
目白大学・社会学部・助教
研究者番号：70632602

(3) 連携研究者

箕浦 康子 (MINOURA YASUKO)
お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科・名誉教授
研究者番号：20135924